

# 『源氏物語』「朝顔」巻論

——女三宮物語の伏線として——

星 山 健

## 一、はじめに

『源氏物語』「朝顔」巻は、藤壺没後における、光源氏の朝顔姫君への求婚を中心とする物語である。彼女は早く「帚木」巻においてその存在が読者に示されていたものの、「賢木」巻における齋院卜定以後は物語のはるか遠景に置かれていた人物である。そのような彼女がこの「朝顔」巻に至るとにわかに光源氏の恋愛対象として再登場するのだが、結局彼女は光源氏と「風雅の友」<sup>(1)</sup>としての関係を保ちつつも、決して男女の仲に至ることはない。それは彼女の光源氏に対する結婚拒否として多くの研究者の注目を集めるところとなり、これまでさまざまな観点からその理由が考究されてきた<sup>(2)</sup>。

たしかに彼女が一貫して光源氏を受け入れようとしなかったことは事実である。しかしながら物語状況を勘案した場合、二人が結婚に至らなかった主たる理由は彼女の意志とは別のところにあると思われる。

本稿においてはまず、彼女の父宮の在／不在が、光源氏と朝顔姫君の結婚の成否にいかなる影響を及ぼしたかにつ

いて検討する。その上でそれを、「朝顔」巻後半における紫上の「据え直し」、「若菜上」巻における女三宮降嫁といった問題と合わせ考えることにより、本巻における朝顔姫君の再登場の意義、ひいては『源氏物語』正編における本巻の役割について詳らかにしていきたい。

## 二、齋院卜定以前における不婚の理由

光源氏と朝顔姫君の結婚はなぜ実現しなかったのか。まず二人の若き日に遡りその理由を考える上で興味深い記述が「少女」巻にある。

この大臣の、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを、何か、いま始めたる御心ざしにもあらず。故宮も、筋異になりたまひて、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひては、思ひたちしことをあながちにもて離れたまひしことなどのたまひ出でつ、悔しげにこそ思したりしをりをりありしか。(三一一八―一九)<sup>(3)</sup>

女五宮が朝顔姫君に対し光源氏との縁談を勧めるに際しての言である。光源氏が左大臣家の婿となつてしまい、我が娘と縁づけられなかったことを、朝顔姫君の父桃園式部卿宮が生前悔しがつていたというのである。光源氏と葵上の縁組がなされたのは「桐壺」巻、光源氏元服の際である。ではその当時、朝顔姫君が光源氏と結ばれる可能性はあったのか。その答えはどうみても否である。

引入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御気色あるを、思しわづらふことありけるは、この

君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御氣色賜らせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添臥にも」ともよさせたまひければ、さ思したり。(二―四六)

左大臣からの結婚の申し出を桐壺帝がすみやかに受け入れた理由は何か。それは母方の親族を皆亡くした光源氏にしかるべき後見を儲けることにある。臣下最高の位にある左大臣からの申し出であつたからこそ、帝はそれに乗つたのである。政治的権力とは縁遠い親王である式部卿宮では光源氏の十分な後見となり得ない。宮家にこの縁談に割つて入る余地はない。先に見た女五宮の言に、「思ひたちしことをあながちにもて離れたまひしこと」とあつたが、朝顔姫君本人の意志に関係なく、これは実現不可能な縁組だつたかと思われる。

では、葵上が正妻に収まつた後、二人の結婚の可能性はありえたのか。こちらも疑わしい。

かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じと深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどをさなし。さりとして、人憎くはしたなくはもてなしたまはぬ御氣色を、君も、なほことなりと思しわたる。(二―一九)

右は「葵」巻、六条御息所に対する光源氏のつれない態度を見ての、朝顔姫君の感慨や光源氏への対応を記した箇所である。「帚木」巻では紀伊守邸の女房の口を通し、光源氏から贈歌のあつたことが語られていた彼女であつたが、その言い寄りはその後も続いている様子である。しかしながらそこに、簡単には靡かぬ彼女に対する光源氏の焦りなどとはうかがえない。「末摘花」巻頭に語られるように、葵上や六条御息所の、「うちとけぬかぎりの、氣色ばみ心深き方の御いどましさ」(二―二六五)に疲れ、「いかで、ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人のつつましきことなからむ、見つけてしがな」と思つていた光源氏である。式部卿宮という、決して軽んじられぬ父が健在であ

る朝顔姫君に、彼が正式な求婚をするとは考えにくい。またその結婚は、現在自身の唯一の後見たる左大臣家との良好な関係を維持するためにも、避けるべきものであつたろう。光源氏は朝顔姫君に対し好き心を抱くことはあつても、それは婿取られる正式な縁組を望む気持ちとは大きく異なつていた。それは「賢木」巻、彼女の斎院卜定後、二人が文を交わす場面での語り手のことばからも明らかである。

わりなう思さば、さもありぬべかりし年ごろはのどかに過ぐいたまひて、今は悔しう思さるべかめるも、あやしき御心なりや。(二—二二〇)

そもそも、この朝顔姫君物語の発端である「帚木」巻の噂話は、光源氏が彼女を垣間見たことを契機とする贈歌を語るようだが、その女房達の話聞く光源氏の態度からして、例えば紫上を垣間見た夕霧(「野分」巻)、女三宮を垣間見た柏木(「若菜上」巻)のような心の動揺があつたとは思いがたい。

思すことのみ心にかかりたまへれば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時、などおぼえたまふ。ことなることなければ、聞きさしたまひつ。式部卿宮の姫君に朝顔奉りたまひし歌などを、すこし頬ゆがめて語るも聞こゆ。(二—九五)

女君の「朝顔」を見るといふ、異例なまでの接近を経ても、光源氏の心に彼女に対する強い執着心が生じることにはなかつたわけである。

坂本昇氏は、二人の結婚問題について以下のように読み解く。

源氏は朝顔を自分から思い初めたのではなく、むしろ式部卿宮の迷惑を察した上で言い寄ったものではなかったろうか。朝顔は周囲の意向を承知していて源氏を拒絶した。源氏が左大臣家に正式に婿取られていることが、当初朝顔をして源氏を拒否せしめる理由であつたろうし、父宮もそれを納得したものであろう<sup>(4)</sup>。

しかし、父が持ちかけ、先方が承諾した縁組を、「周囲の意向」を無視して女君の意志により破談にすることなど、当時の貴族社会においてあり得たのだろうか。概して近年の朝顔姫君研究は、彼女の結婚拒否という態度の影響を過大視するきらいがある。文学作品として物語が何を強調して語っているかという問題と、作品内世界で起こる出来事の因果関係、つまり光源氏・朝顔姫君の不婚の理由とは分けて考えるべきであらう。

「三の宮うらやましく、さるべき御ゆかりそひて、親しく見たてまつりたまふを、うらやみはべる。この亡せたまひぬるも、さやうにこそ悔いたまふをりありしか」とのたまふにぞ、すこし耳とまりたまふ。(二―四七二)

右は、「朝顔」巻冒頭、光源氏が始めて桃園宮邸を見舞った際の女五宮の言と、それに対する光源氏の反応である。小学館新編日本古典文学全集が、「式部卿宮が、源氏を婿にと望んでいたらしいと分つて、これはまだ脈があると察せられるので」(傍線は稿者による)<sup>(5)</sup>と頭注を施しているように、式部卿宮の意志を当の光源氏はそれまで知らなかった様子である。つまり、二人の間に具体的な縁談はなかったということである。

光源氏は朝顔姫君に対し長年にわたり文を送り続けていた。当然それは父式部卿宮も知るところであつた。しかしながら、光源氏が寄せる愛情の永続性に疑問を抱く彼女は、結婚を希望しなかった。その態度を見て父宮は、光源氏を理想の婿と思いがちながらも、具体的な働きかけをすることはなく、また、新たに婿取られるような関係を望まない光

源氏も、彼女にそれ以上強く求婚の態度を見せることはなかった。以上が、「葵」巻に至るまでの二人の關係の真相ではなからうか。決して朝顔姫君が拒んだから婚儀が成立しなかったなどという単純な話ではない。

では、正妻葵上の死後における、二人の結婚の可能性はいかがであらうか。光源氏は葵上の死後、左大臣邸で喪に服する中、朝顔姫君に文を贈っている。その返歌を受け、光源氏は改めて彼女に心惹かれながらも、

これこそかたみに情も見はつべきわざなれ、なほゆゑづきよし過ぎて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり、  
対の姫君をさは生ほしたてじ、と思す。(二一五八)

というように、六条御息所批判を介し、彼の意識は紫上に向かつてしまう。ここではまだ、「ただ女親なき子を置きたらむ心地」(同)であつた光源氏だが、葵上の四九日が過ぎ二条院に戻ると、彼女と新枕を交わした。すると、「今夜も隔てむことのわりなかるべきこと」(二一七三)と思うまで彼女に魅了され、その父兵部卿宮にも二人の關係を報告した。右大臣家から提示された朧月夜との縁談も、「口惜しとは思せど、ただ今は異ざまに分くる御心もなくて、何かは、かばかり短かめる世に、かくて思ひ定まりなむ、人の恨みも負ふまじかりけり」(二一七六)と拒んだ光源氏である。それをにわかに式部卿宮家の婿になることを望むとは思われない。そして、その一年数ヶ月後に、朝顔姫君は斎院に卜定され、結婚の叶わぬ身となる。

若き日の光源氏と朝顔姫君をめぐる状況は、以上のとおりである。朝顔姫君が光源氏の初婚の相手とならなかったのは、彼女の意志とはほぼ無關係であり、親王である彼女の父宮では光源氏の政治的後見役を果たせないからである。また、葵上との結婚後については、社会的地位もある式部卿宮家に婿取られることを避けたなどの理由により、朝顔姫君に心惹かれながらも、現実的な結婚を切に望んではいなかった様子が光源氏にうかがえる。つまり、彼

女の結婚拒否の態度というものは、二人が結ばれなかったことの副次的な理由にすぎないのである。

### 三、齋院退下後における不婚の理由

結論めいたことを先に述べるならば、齋院卜定以前においては、朝顔姫君の父が式部卿宮という重職にあり健在だったことが二人の不婚に影響しているのに対し、齋院退下後においては、逆に父宮の不在こそが二人が結ばれることなく終わる遠因となっている。

齋院は御服にておりゐたまひにきかし。大臣、例の思しそめつること絶えぬ御癖にて、御とぶらひなどいとしげう聞こえたまふ。(二―四六九)

「朝顔」巻はこのような書き出しをもつて、約七年もの間物語世界から消え去っていた姫君に改めて光を当てる。彼女が光源氏とのいまさらの結婚を望んでいないことは本巻を通して一貫している。しかしこの場合も、彼女の態度というものは二人が結婚に至らなかつたことの一因にすぎない。

源氏の二度の訪れにも、宣旨を通して交される話は、すべて過去の事であり、結局「さだ過ぎた」恋は実を結ぶ事もない。齋院の気持が固い丈でなく、源氏にしても、権の人柄に惹かれる半面意地が加つての行きがかり上の行為でもある<sup>(6)</sup>。

森藤侃子氏の指摘どおり、たしかに光源氏の求婚の態度にも煮え切らないところがある。

大臣は、あながちに思し焦らるるにしもあらねど、つれなき御気色のうれたきに、負けてやみなむも口惜しく、（中略）今さらの御あだけも、かつは世のもどきをも思しながら、空しからむはいよいよ人笑へなるべし、いかにせむ、と御心動きて、二条院に夜離れ重ねたまふ（二―四八八）

だが、以下に見るように、彼がこれまでにない執着をもつて朝顔姫君に迫っていることも事実である。

心やまして立ち出でたまひぬるは、まして寝ざめがちに思しつづける。（二―四七五）

たち返り、今さらに若々しき御文書きなども似げなきことと思せども、なほかく昔よりもて離れぬ御気色ながら口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじく思さるれば、さらがへりてまめやかに聞こえたまふ。（二―四七七）

端近うながめがちに、内裏住みしげくなり、役とは御文を書きたまへば（二―四七九）

今宵はいとまめやかに聞こえたまひて、「一言、憎しなども、人づてならでのたまはせんを、思ひ絶ゆるふしにもせん」と、下り立ちて責めきこえたまへど（二―四八五）

また、光源氏が朝顔姫君に相当程度惹かれている証左となる、これまで指摘されてこなかった点として以下をあげる。

「朝顔」巻、二度目の桃園宮邸訪問に際し、光源氏は紫上に一言ことわりを入れている。

「馴れゆくこそげにうきこと多かりけれ」とばかりにて、うち背きて臥したまへるは、見棄てて出でたまふ道ものうけれど、宮に御消息聞こえたまひてければ、出でたまひぬ。（二―四八〇）



光源氏は彼女をうち捨てて出かけることに後ろめたさを覚えながらも、すでに女五宮に訪問の予定を伝えてしまつたゆえにとりやめられないと思い、二条院をあとにするのであつた。では、それを受ける女五宮側はどうであつたのか。

宮には、北面の人しげき方なる御門は入りたまはむも軽々しければ、西なるがごとくとききを、人入れさせたまひて、宮の方にて御消息あれば、今日しも渡りたまはじと思しけるを、驚きて開けさせたまふ。(二―四八二)

まさか連絡があつたその日の内に光源氏の来訪があらうとは思つていなかったため、開門の準備も出来ていなかったという。つまり、不安がる紫上を残し、今日無理に女五宮を訪問する必要はなかつたのである。逆に言うならば、そのような紫上を目の当たりにしても不急の桃園宮邸訪問を明日に延ばせないほど、光源氏は朝顔姫君に心惹かれていたとみてよいであらう。

ゆえに、森藤氏のように、紫上が感じた自らの立場に関する不安を「錯誤」<sup>(7)</sup>と捉えることには従いがたい。光源氏と朝顔姫君との結婚は可能性として十分にあり得た。紫上にとつてその危機はきわめて現実的なものだったのである。「若菜上」巻において紫上はこの一件を以下のように回想している。

前斎院をもねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを(四―五〇―五二)

斎院退下後における光源氏と朝顔姫君の不婚については、この紫上のことばが最も端的にその理由を解き明かしているのではないか。つまり、光源氏は彼女に熱心に言い寄りながらも、むりやり思いを遂げようとはしなかつたので

ある。光源氏は自邸二条院に朝顔齋院の側近女房を呼び出せるほどに桃園宮邸の者達を手なずけている。「宮の内いとかすかになりゆくまゝに、さばかりめでたき人のねむごろに御心を尽くしきこえたまへば、皆人心を寄せきこゆるもひとつ心と見ゆ」(二―四八八)という記述もある。光源氏は朝顔姫君の寝所に忍び込もうと思えば、それも十分に可能だったはずである。当然彼女も女房達の行動に用心している様子であるが<sup>(8)</sup>、まわりが皆男君と結託してしまえば、そのような姫君の抵抗など何の意味も持たないことは、後の宇治大君の物語が証明している。

宮人も、上下みな心かけきこえたれば、世の中いとうしろめたくのみ思さるれど、かの御みづからは、わが心を尽くし、あはれを見えきこえて、人の御気色のうちもゆるばむほどをこそ待ちわたりたまへ、さやうにあなたがちなるさまに、御心やぶりにこえんなどは思さざるべし。(二―一〇)

しかしながら光源氏は、そのような行動に及ぶことはなかった。それは大臣の位にまで昇り詰めた者の分別でもあろうし、また、老いの意識の表れ<sup>(9)</sup>でもあろう。彼の心のうちに、もはやことを強引に成し遂げようとする意志がいならば、二人を結びつけられるものは第三者の働きかけしかあるまい。そこで浮かび上がってくるのが、朝顔姫君の父式部卿宮の不在という問題である。

もし彼がいまだに存命であり、晩年を迎え将来への不安から誰かに我が娘を託そうとしたならば、過去の経緯からして当然その相手は光源氏であろう。すでに正妻葵上も亡く、また社会的に十分自立した光源氏の側にとつても、そのような形での縁組は以前と異なりもはや特に拒むべき対象ではない。今となつては、結婚したとしていつまでも婿として桃園宮邸に通う必要もなく、ただちに彼女を自邸に迎え入れることも可能であろう。むしろ対社会的にも、式部卿宮という権威を有する父親に娘の後見を懇望されたならば、それを断ることの方が難しいのではないか。光源氏

にしかるべき正妻がいない現状にあつて、世間から見て二人はまさに「似げなからぬ御あはひ」（二一四七八）なのである。新山春道氏の調査が示すように、二世女王・前斎院（朝顔姫君）が一世賜姓源氏（光源氏）と結ばれることにタブー性はない<sup>100</sup>。

斎院卜定以前にあつては二人の結婚に対しむしろ妨げとなつた父の存在であるが、ここでは彼が不在ゆえに、光源氏が最後の一步を踏み出せないまま終わってしまった感が強い。父が自らの没後を考え、娘の将来を案じ、光源氏に後見としての結婚を懇願するという展開ならば、朝顔姫君も本来的には異性として惹かれるところの強い彼との結婚を拒み通すことは出来まい。朝顔姫君が示す光源氏への拒否の姿勢は、たとえ寝所に忍び込まれても男女の關係には至るまいとする、「総角」巻における宇治大君の薫に対する態度などとは異なる。そもそも大君も父八宮存命中に薫との縁組がなされたならば、それをかたくなに拒もうとはしなかつたと思われる。また、たとえば「椎本」巻、「亡からむ後、この君たちをさるべきものたよりにもとぶらひ、思ひ棄てぬものに数まへたまへ」（五一—七九）と懇願する八宮に対し、もし薫が大君との結婚を望んだならば、八宮は娘の意志など問うことなく、その場で承諾したであろう。それが当時の貴族女性がおかれていた立場かと思われる。

むろんこの物語の展開としては、父式部卿宮の逝去に伴う朝顔姫君の斎院退下である。しかし退下の理由は、結果的に物語に登場することのない母の死でもかまわなかつたはずである。

ところで、「朝顔」巻研究において、これまで注目されてきた人物の一人として女五宮がいる。式部卿宮の妹としてにわかに登場させられる女性であるが、彼女にはどのような物語上の設定意図があるのだろうか。

女五の宮の場合は、その病氣見舞ということ、源氏が桃園宮邸を訪問する口実に利用されているが、そういう口実がなければ

ば源氏は朝顔宮に近づけないというわけのものではないし、それだけのことのために二度にわたる対面場面が設定されたとも思えない<sup>(11)</sup>。

吉岡曠氏は以上のように指摘した上で、「結局、二人（稿者注 女五宮と源典侍）の登場はこの巻の回想的雰囲気の色濃く漂わせるための道具立てとしかうけとりようがない」とする。また、先掲平田論文<sup>(12)</sup>は、光源氏の老いへの意識との関係において彼女を捉える。いずれも妥当な理解かと思われるが、彼女の登場意義は朝顔姫君の父式部卿宮の不在を際立たせることにもあろう。

三の宮うらやましく、さるべき御ゆかりそひて、親しく見たてまつりたまふを、うらやみはべる。この亡せたまひぬるも、さやうにこそ悔いたまふをりをりありしか（二―四七二）

これは「朝顔」巻冒頭、始めて桃園宮邸を訪れた光源氏への彼女の言である。この直後、光源氏は朝顔姫君と数年ぶりの対話を果たす。

故宮も、筋異になりたまひて、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひては、思ひたちしことをあながちにもて離れたまひしことなどのたまひ出でつつ、悔しげにこそ思したりしをりをりありしか。（三―一九）

そしてこちらは「少女」巻冒頭、朝顔姫君に光源氏との縁組を勧める彼女のことはの一部である。これに対し、改めて朝顔姫君が断りの意志を伝え、その後、特に結婚を無理強いしようとはしない光源氏を描くことをもって、一連の物語は幕を閉じる。

光源氏による朝顔姫君求婚譚の発端と終局に置かれた右の女五宮の言はいずれも、光源氏を婿と出来なかったことを何度も悔やんでいた式部卿宮の姿を語る。それはもし彼が生きていたならば、いまでもまだその結婚を強く望むであらうことを読者に印象づける。

そして、この求婚譚における父の不在の重要性を改めて思い起こさせるものが、このはるか後、「若菜上」巻において展開される女三宮降嫁という事態である。朝顔姫君物語が女三宮物語の先蹤たることは、特に紫上像との関連において早くに指摘されているものの<sup>13)</sup>、その具体的な関係の有り様についてはいまだ十分には解き明かされていない。次節以降、この問題について検証する。

#### 四、「朝顔」巻における紫上の「据え直し」

朝顔姫君物語から女三宮物語への展開を読み解く前提として、まず「朝顔」巻における紫上と藤壺の関係性について確認する。

朝顔姫君の再登場の意味を紫上の妻の座に揺さぶりをかけることに見る前掲森藤論<sup>14)</sup>を受け、秋山虔氏「紫上の変貌」は以下のように説く。

僅宮の登場は、けつきよく紫上をして、光源氏との生活、つまり自分の生活基盤に対して根本的な不信をいだかせるがため以外のものではなかったということになる。いいかえれば紫上の不安な位地を確認するそのことが、紫上の、物語の世界における据え直しの作業にはかならなかったのではないか<sup>15)</sup>。

まさに本巻の存在意義を説き明かすものとして、発表直後から多くの支持を集めてきた論考であり、その指し示す方向性についてはたしかに認められるべきものと思われる。しかし、続く、「それはかつてのように藤壺の形代としてただ無媒介に光源氏を吸引する昔物語的な女主人公としてではない。（中略）要するに世の夫婦の関係の一般と変ることないつながりかたにおいてつながることになるのであった」という理解については従いがたい。本巻における紫上は、むしろ藤壺の形代としての性格が強まっているのではないか。この紫上と藤壺の関係性という問題については、吉岡曠氏に重要な指摘がある。

朝顔姫君への求婚譚が一区切りついたところで、物語は二条院にて童女たちの「雪まろばし」（二一四九二）を見物しながら語り合う光源氏・紫上夫妻を描き出す。

I外を見出だして、すこしかたぶきたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえてめでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつべし。（二一四九四）

引用Iはそこでの唱和の際、光源氏が紫上を見ての感慨である。これについて吉岡氏は、紫上と藤壺が対比されたこれまでの一連の記事を列举し、特に「賢木」巻の一節、

髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなきにははしさなど、ただかの対の姫君に違ふところなし。年ごろすこし思ひ忘れたまへりつるを、あさましきまでおぼえたまへるかなと見たまふまに、すこしもの思ひのはるけどころある心地したまふ。（二一一〇）

との関係について以下のように説く。

以上三つの記事（稿者注 若紫・紅葉賀・葵）は、一貫して、紫上が藤壺の形代であり、藤壺に似ていることが紫上のレゾン・デートルだったことを語っている。ところが、最後の賢木巻の記事だけは、紫上が藤壺に似ているというかたちではなく、逆に藤壺が紫上に似ているというかたちで語られているのである。葵巻の記事と賢木巻の記事との間に、源氏と紫上の新枕が介在していることと、この記事の直後に藤壺が出家を遂げてしまうことを考えあわせると、この逆転現象は、たまたまそういうふうになされたといったようなものではなく、明らかに意図的な逆転だといってよいであろう。それが、朝顔巻の右の一節（稿者注 本稿における引用Ⅰ）では、また、見事に再逆転してしまっている。

作者は「恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえて」と、源氏が時の間も藤壺を忘れていなかったことを、まるで自明のことのように語っているが、夫婦の語らいのクライマックスにとび出してくるこの一句は、読者にとっては必ずしも自明ではなく、唐突であり、衝撃的でもある。源氏が一生をかけて「恋ひきこゆる人」は、やはり藤壺だったのか、と思う。

源氏は紫上という理想的な妻に十分に満足していながら、やはり完全には満足していなかった。藤壺というどうにもならない存在に対する、どうにもならない思慕を、遂にふり捨てることができないでいる<sup>(16)</sup>。

卓見であろう。ただし残念ながら、その「再逆転」がなされることの意味を吉岡氏は論究してはいない。そこで、問題の「朝顔」巻、引用Ⅰの場面に戻り、改めて検討する。

朝顔姫君に対し、「いささか分」けられた光源氏の「御心」を紫上が取り戻すことが出来たのは、「恋ひきこゆる人」藤壺の「面影」に彼女が似るからだという。藤壺はすでに故人である。その前提において紫上は「似るものなき、絶対的な存在なのである。

かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦のうきねか（二―四九四）

右は、その際の光源氏の詠歌である。「むかし」は当然、藤壺との過去を意味する。彼は目の前の紫上を通して藤壺を幻視しているのである。続く、藤壺が彼の夢枕に立ったエピソードも、彼の藤壺に対する執着の強さを語る。結局『源氏物語』は、「賢木」巻における藤壺出家をもって、一女性として独立させつつあった紫上に対し、この「朝顔」巻では、朝顔姫君への求婚騒動により彼女に危機感を与えた後、改めて彼女が「紫のゆかり」であることを強調し<sup>17</sup>、それを前提に他の女性に対する優越性を付与しているのである。「朝顔」巻における「紫上の、物語の世界における据え直し」とは、このような意味において認められるべきものではないか。

紫上は朝顔姫君の存在に大きな脅威を感じ、一度は秋山氏の言うとおり、「自分の生活基盤に対して根本的な不信」を抱いたであろう。しかし、光源氏と朝顔姫君との関係は結婚に至らぬまま終わり、彼女は雪の夜の弁明を聞き、およそ心のやすらぎを取り戻したものと思われる<sup>18</sup>。それは周囲を見渡し、彼女のライバルとなるべき女性がもはや存在しないことによる。その理解はこの巻を読み終えた読者のものでもあろう。藤壺に似ることが光源氏の心を掴む絶対条件であるなら、今の物語世界を見渡すかぎり、彼女以外にその該当者はいないからである。そして、その前提が大きく崩されるのが「若菜上」巻、女三宮の登場である。

## 五、朝顔姫君物語から女三宮物語へ

「若菜上」巻は、出家を思う朱雀院が愛娘の将来を案じるという形で、新たな作中人物女三宮について語り始める。



もう一人の「紫のゆかり」の登場である。

この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけめ、容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれたまひし人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮おしなべての際にはよもおはせじを（四―四一）

光源氏が彼女に関心を抱いた理由は明らかにその点にある。この展開は、「朝顔」巻において紫上が改めて「紫のゆかり」として据え直されていたからこそ一層有効なものとなろう。ただ一人の「紫のゆかり」であることをもって保証されていた他の女性に対する優越性だからこそ、女三宮の登場をもつてにわかに揺らぎ始めるのである。

そして、さらに注意すべきは、もう一人の「紫のゆかり」が現れたからといって、光源氏が自らその女性に言い寄っていったわけではないことである。

院の頼もしげなくなりましたまひにたる、御とぶらひに参りて、あはれなることどものありつるかな。女三の宮の御事を、いと棄てがたげに思して、しかじかなむのたまはせつけしかば、心苦しくて、え聞こえ辞びずなりにしを、ことごとしくぞ人は言ひなさむかし。（四―五一―五二）

右は、朱雀院と対面し女三宮降嫁を受け入れた翌日の、光源氏の紫上への言である。もちろん、そこに言い訳めいたものがないとはいえないが、およそ彼の本音が述べられていると理解してよからう。それは、このことばを受けた紫上の心中思惟からも裏付けられる。

心の中にも、かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなさじ、わが心に憚りたまひ、諫むることに従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず、堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすばほるさま世人に漏りきこえじ（四―五三）

傍線を付したように、降嫁は不可抗力の事態であつたという認識で二人は一致している。では、光源氏はなぜ朱雀院の申し出を断り切れなかつたのか。そこに朱雀院の、准太上天皇とも異なる院としての威光を見ることが出来る<sup>(9)</sup>。だが、右の「心苦しくて」を含め、光源氏がこの件について朱雀院に対し、一貫して「心苦し」と思っていることは見逃せない。

心苦しき御事にもあなるかな。（四―三九）

まほにはあらぬ御氣色を、心苦しく見たてまつりたまふ。（四―四七）

やはりこの降嫁受け入れは、自ら亡き後の娘を思う朱雀院への同情によるところが大きかつたのであろう。もし「若菜上」巻冒頭で朱雀院がにわかに亡くなつたとしたならば、一人残された女三宮に対し、彼女がもう一人の「紫のゆかり」だからといって、光源氏が言い寄るようなことはあり得たであろうか。それは想像しがたい。彼にそのような若さが残っていないことは、ここに至るまでの物語が証明するところである。

そこで遡つて思い出されるのが、朝顔姫君への求婚譚である。女三宮降嫁の噂を聞いた紫上の反応として以下のよう

<sup>(9)</sup>。

紫の上も、かかる御定めなど、かねてもほの聞きたまひけれど、さしもあらじ、前斎院をもねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを、など思して、さることやあるとも問ひきこえたまはず、何心もなくしておはするに  
(四一五〇—五一)

では、結婚に辿り着くことのなかった朝顔姫君の一件と、今回の女三宮降嫁では何が異なるのか。当人が「紫のゆかり」か否かもさることながら、なりふり構わず女性を我がものとする若さをすでに失った光源氏を改めて結婚へと導いたものは、女君の父の存在である。出家した朱雀院を光源氏が見舞った際の対話は、互いに社会的地位を背負った者ゆえ、婉曲的な表現が多くわかりにくい。しかし、左中弁を介し内意を伝えた上で、この場において改めて女三宮の結婚問題を持ち出すのは、朱雀院が光源氏に後見を懇願しているに等しい。娘の後見役としての結婚を依頼する父親の有無、それが結婚の成否を分けたのであり、また女三宮物語においては、その社会的権威のある父の存在が、いつそう紫上を苦しい立場に追い込んでいくことになる。

朝顔姫君物語と女三宮物語については、これまで研究史上その対応関係については多くの指摘がなされながらも、巻の遠さゆえか、物語の構想という問題にまで踏み込んだ発言は見られなかった。しかし、「朝顔」巻における「父の不在」と紫上の「据え直し」が、「若菜上」巻の「父の在」ともう一人の「紫のゆかり」登場の伏線的役割を果たしていることは、以上の考察から明らかであろう。やはり、「朝顔」巻執筆の段階において、すでに作者の頭の中には女三宮物語の概要がイメージされていたと見るべきではないか。仮に、朱雀院の娘というところまで具体的な人物設定がなされていなかったとしても、もう一人の「紫のゆかり」と光源氏との結婚がその父の強い意向によりなされる、という程度の構想があったからこそ、その伏線として「朝顔」巻の物語が描かれたと考えられるのである。

## 六、ま と め

朝顔姫君がまず光源氏元服時の添臥となり得なかったのは、彼の政治的後見となれぬ皇族、式部卿宮の娘だったからである。そして、若き日の光源氏は彼女に心惹かれながらも、左大臣家以外に改めて婿取られるような結婚は望まなかった。そのように斎院卜定以前においては、父宮の存在が二人の結婚成立に負の影響を及ぼしていたのに対し、斎院退下後においてはその父の不在こそが、結果的に二人が結ばれることなく終わる一因となっている。須磨・明石流離を経て政界復帰した後の光源氏には、もはや好き心だけで動くような若さはない。ところが彼も四十歳になるうとする「若菜上」巻に至って、院という社会的地位を背負った父の懇望により、思いがけない降嫁が成立するのである。

むろん、女三宮受け入れの背景には、彼女がもう一人の「紫のゆかり」であることも大きく関わっている。それも、「朝顔」巻後半において、すでに個として自立しつつあった紫上が改めて「紫のゆかり」の立場に据え直されていたことが、その展開に一層の重みを与えるのである。

「朝顔」巻は、「長篇としての物語のプロットの上ではむしろ殆ど意味を持たぬものであるかにもみえる<sup>(21)</sup>」、あるいは、「長編物語としての位置づけが、一見困難<sup>(22)</sup>」などと評されることの多い巻である。しかしこの巻は、光源氏が青年時代に関わった女性のうちの最後の一人、朝顔姫君との関係を結論づける<sup>(23)</sup>だけでなく、結婚を懇望する父の在／不在、また、藤壺没後の紫上の「紫のゆかり」としての絶対性（唯一性）／相対性といった問題において、遠く「若菜上」巻とも密接な関係を有する、物語展開上きわめて重要な、結节点的な役割を果たす巻なのである。

注

(1) 姥澤隆司氏「哀傷と交情の構図——朝顔卷の光源氏と朝顔宮——」(『帯広大谷短期大学紀要(第一分冊)』二三一—、一九八六・三)。

(2) 池田節子氏「研究史——朝顔の姫君」(『人物で読む『源氏物語』第十四卷——花散里・朝顔・落葉の宮』勉強出版、二〇〇六・五)等参照。

(3) 本稿における『源氏物語』の本文引用は小学館新編日本古典文学全集版に拠る。引用に際しては適宜、巻数・頁数を記した。なお、付した傍線はすべて稿者によるものである。

(4) 坂本昇氏「朝顔の生き方——親王の女(一)——」(『源氏物語構想論』明治書院、一九八一・三)。  
二一四七二。

(5) 森藤侃子氏「権斎院をめぐる」(『源氏物語——女たちの宿世——』桜楓社、一九八四・一一)。  
注(6)に同じ。

(6) 「かつはさぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつ」(二一四八七)とある。

(7) 平田喜信氏「朝顔巻試論——前半部を中心として——」(『平安時代の和歌と物語』桜楓社、一九八三・三)。

(8) 新山春道氏「二世女王の婚姻——朝顔の姫君を中心に——」(『中古文学』六七、二〇〇一・五)。

(9) 吉岡曠氏「鴛鴦のうきね——朝顔巻の光源氏夫妻——」(『作者のいる風景 古典文学論』笠間書院、二〇〇二・一二)。  
注(9)に同じ。

(10) 秋山虔氏「紫上の変貌」(『源氏物語の世界』東京大学出版会、一九六四・一二)はその書き出しにおいて、「この『権』巻における紫上像には、後の『若菜』巻に至って彼女がになわせられるであろう問題がすでに提起されている」と説いている。

(11) 注(6)に同じ。

(12) 注(3)に同じ。

(13) 注(11)に同じ。

(14) 倉田実氏「『朝顔』巻の意味」(『紫の上造型論』新典社、一九八八・六)は、光源氏が「君こそは、さいへど紫のゆゑこよなからずものしたまふれど……」(二一四九二)と言及することをもって、本巻では紫上が、「再び藤壺のへゆかり」

であることが確認されていく」と説く。

- (18) 村井利彦氏「朝顔齋院の作用」(『岡一男博士頌寿記念論集 平安朝文学研究』一九七・一・三)、注(17)の倉田論文、注(11)の吉岡論文等。

- (19) 山上義実氏「『源氏物語』における朱雀院の役割に関する試論」(『文芸研究』七八、一九七五・一)。

- (20) 大朝雄二氏「女三宮の降嫁」(『源氏物語正篇の研究』桜楓社、一九七五・一〇)は、「紫上が朝顔君の事件を回想して降嫁の噂を自らの心に打ち消す心の動きは、この両帖の出来事が互いに決して無関係なものではなく、一つの類縁関係として把握すべきことを示しているように思われる。紫上が類似の事件としてすぐ朝顔の一件が思い起されているということ(中略) 左中弁や朱雀院によっても源氏の朝顔に対する懸想のことが話題になっていることに対応するものであり、この両帖の関係の深さを窺わせるのに十分なものがある」と説く。また、倉田実氏「女三の宮と紫の上」(注(17)論文と同書)は、「若菜上」巻の「うらなくて過ぐしける世」(四一五四)との感慨は、すでに「朝顔」巻に「かかりけることもありける世をうらなくて過ぐしけるよ」(二一四八〇)とあったことの延長と見る。

- (21) 原岡文子氏「朝顔の巻の読みと「視点」」(『源氏物語 両義の糸——人物・表現をめぐって』有精堂、一九九一・一)。

- (22) 田坂憲二氏「朝顔」(『新・源氏物語必携』学燈社、一九九七・五)。

- (23) 池田亀鑑氏「新講源氏物語 上巻」(至文堂、一九五一・二)は、「薄雲」巻の解説において、「作者は、この巻までに当然解決しなければならないあらゆる女性たちの始末をつけてゐる。ただ、のこされてゐるのは、朝顔の齋院の身のふり方である。これが朝顔の巻をおこす一つの理由である」と説く。

(ほしやま けん・関西学院大学文学部教授)